

「夢を育み、感動・笑顔・歌声あふれる学校」

学校教育目標

おおらかで たくましく
進んで学ぶ子
地域とともに生きる子

新座市立東野小学校

令和5年1月10日(火)

TEL:479-7280 FAX:482-6794

HP:<http://www.c-niiza.ed.jp/e-higashino/>



東野小学校 だより月号

「令和5年を迎えて」

校長 金澤 勇一

新年あけましておめでとうございます。
令和5年を迎え、新型コロナウイルスは収まりませんが、昨年、一昨年のような厳しさからは脱却し、新たな場面になってきていると思えます。感染症防止、予防に対しての保護者・地域のみなさんのご協力には、感謝しております。今年もみなさんからのご期待にお応えできる学校として、しっかりと取り組んでまいります。引き続き厚いご支援・ご協力の程、よろしくお願ひします。

昨年厚生労働省が実施した令和4年の人口動態統計の年間推計で、10月までのデータですが、令和4年生まれの子ども数(出生数)が約67万人となったそうです。前年の同月までの人数は約70万3000人、その前年は約73万3000人でしたから、毎年3万人ぐらい減少していることが分かりました。2016年生まれの子どもの数(出生数)が98万1000人となることが分かったと報道されていました。平成28年に出生数の総数が100万人を割ってからは、毎年2万人以上減少してきていて、少子化がかなり早く進行してきているのが分かります。

人間は、生理的早産の状態誕生します。生理的早産はスイスの動物学者ポルトマンが提唱した概念で、生理的早産とは、人間の胎児が十分に成熟する(生後すぐに自力である程度の生活が可能)な成体に近い能力を持つ)には、本来22ヶ月程度かかると考えられるにも関わらず、実際には10ヶ月と未熟な状態で生まれてくることを示しています。未熟な状態で生まれてくる理由は、人間は脳の発達著しく、産道を通るには10ヶ月程度の頭蓋サイズが限界であるためと考えられています。草食動物は、肉食動物に食べられる危険性が高いため、生まれてすぐに走って逃げる必要があることから、生理的に熟した状態で誕生します。しかし、食物連鎖で上位にいる動物は、子をより未熟な状態で産みます。親の胎内で育つよりも、外界の刺激を受けた方が豊かに成長することができるからだそうです。人間は、サルよりさらに脳が大きくなったので、産道を通り抜けられるギリギリまで母親の体内で育てられますが、サルに比べてもカラダの成長はいっそう未熟です。しかし、親が手をかけてやるのがさらに子どもの脳(情操)の発達を促しますので、より高度な文化を築くことができたと言われている。

多摩動物公園や上野動物園で園長を歴任された中川志郎氏は、生物としての子育てには、生物学的な学習と生態的な学習が必要であると主張しています。氏は、「霊長類で言えば、絶対的な安心感があつた子宮から生まれ出た子どもに、子宮にいた時と同じような安心感を与えるのが、母親の抱擁や言葉かけです。その中で子どもには、自分を保護してくれるのが母親であり、自分は母親と同じ生き物であると刷り込まれます。こうした密着状態を通して、母親への絶対的な信頼感(原信頼)が生まれる。これが生物学的学習です。」「原信頼があるから、母親の行動を真似たいという衝動が起きます。そうして生きる術を学んでいくのが生態的学習です。また、母親への信頼が、母親と一緒にいる人への信頼へと広がっていきます。信頼がなければ絆が生まれません。まず、母親への原信頼があり、次に父親と絆を結び、祖父母や兄弟と絆を結んでいきます。長じて集団に入る時も、母親という基地に帰れる安心感があるから踏み出せるんです。」と述べています。さらに父親については、「父親は母親よりも生物学的にはつながりが細いので、母親が父親を頼っている、尊敬しているという2点がないと、子どもには伝わりません。」と話しています。(以前のたよりに記載したことがあります、年の初めに大切だと思いますので、再掲しました。)

人類は、教育や学習によって極めて高度な文明社会を築き、発展させてきています。しかし、人間の存在は自然の一部にすぎませんので、自然界の中で生かされているという認識を持ち、自然と調和した営みを継続していくことが大切であります。人類は、自然の営みに逆らうことなく、豊かな子育てや学びを通して自然界に貢献していく責務があるようにも思えてきます。今日から3学期が始まりますが、家庭や地域の教育力もお借りしながら、一人一人の子どもに、独り立ちしてたくましく生き抜いていくことのできる力をはぐくむために、教育活動の充実を図ってまいります。

